

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370820

研究課題名(和文) 平安時代出土文字資料の動態的歴史分析 荷札の終焉 にみえる木簡の機能

研究課題名(英文) Dynamics and historical analysis of excavated written materials to the Heian Period

研究代表者

山本 崇 (YAMAMOTO, Takashi)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：00359449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本申請研究は、平安時代になると木簡が急速に減少する事実を、律令制の変質との関係で明らかにすることを目的としている。

まず、現在出土している平安時代木簡4251点を網羅的に集成した。次いで、その機能と内容を検討し、木簡が減少する要因は、都城木簡の減少、荷札の消滅、削屑の減少に求められ、その背景に文書木簡の可視化・大型化した利用を見出した。

以上を踏まえ、平安時代における木簡の減少は、文書行政の深化、紙の文書の日常化と、それに対応して広まる木の堅牢性を重視した使用によるものと理解した。

研究成果の概要(英文)：This application study, to clarify the relationship of the fact, that the wooden tablets decreases rapidly when it comes to the Heian period, and alteration of the deterioration of the Ritsuryo system.

First of all, I have created a completely collection of the wooden tablets of Heian period 4251 points. Then, I considered the function and contents of the wooden tablets of Heian period. Factors that wooden tablets were decreased, be sought to decrease of the wooden tablets from Palece site and Capital site, reduction of the use of baggage tallies, and decrease of shavings. In addition, reduction of the wooden tablets in Heian period, was understood to be due to background there is a such as visualization and upsizing of the wooden documents.

In the based on the above, reduction of the wooden tablets are due to deepening of the document administration, daily use of paper documents, and use with an emphasis on the robustness of the tree.

研究分野：日本古代史

キーワード：木簡 文書木簡の大型化・可視化 文書管理 削屑の現象 荷札の衰退

1. 研究開始当初の背景

(1) 平安時代になると、なぜ木簡は急速に減少していくのか。木簡出土の現状に由来するこの素朴な疑問を、本申請研究は、律令制の変質との関係から考えようとしたものである。

平安時代木簡の少なさを例示すれば、平安京跡から出土した木簡は、1000点余り報告されているが、その7割は近世木簡であること、平安時代の都城出土木簡は奈良時代やそれ以前の7世紀木簡と比較して圧倒的に少ないことがあげられる。平安時代木簡は、その出土が量的にも地域的にも限られており、研究を開始する当初には、出土遺跡や出土点数の概数すら整理されていなかった。この背景に、木簡研究の中心が圧倒的な出土量を誇る奈良時代木簡にあることを見て取るができる。

(2) 一方、7世紀木簡の特徴を、とくに文書木簡について検討した前採択課題において、出現期の木簡が担った機能を次のごとく指摘した。第1は、奈良時代木簡の主体は文書と荷札であり、それらは律令の規定に見事に一致していること。第2は、これに対して出現期の木簡は、帳簿、付札、呪符などを主体とし奈良時代とは異にすること、第3は、平安時代の木簡は、文書や荷札は少なく、帳簿や大型の木札、呪符木簡などが目立つこと。以上の知見を踏まえ、平安時代木簡の特徴は、むしろ出現期木簡の機能と近似するもので、律令制の変質とともに旧来の機能が再び表面化してきたのではないかと、この見通しを得ており、この検証を進める形で研究を開始した。

2. 研究の目的

上記の研究状況に鑑み、本申請研究の目的は、次の2点を明らかにすることである。

(1) 平安時代木簡の網羅的収集と分類

(2) 平安時代木簡の機能の解明

以上により、申請研究終了時の2016年3月現在における平安時代木簡の総点数4251点の全貌をはじめ把握するとともに、その内容分類、機能論的分析を踏まえ、平安時代木簡の時代的特徴を明らかにすることを課題とした。

3. 研究の方法

平安時代木簡の網羅的収集にかかわり以下の研究方法を用いた。

(1) 木簡出土状況の把握

全国の出土状況を確実に把握するため『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』(図書)を作成したほか、より利用の便を図るため、2004年に編集した『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』との統合版である『全国木簡出土遺跡・報告書総覧2014』(図書)を編み、その過程で平安時代木簡の出土事例にの確実に資料化をはかった。2016年3月現在、全国が出土したすべて時代の木簡は、

1480余りの遺跡から、44万点余りに及んでいるが、そのうち、平安時代木簡は、300遺跡から4251点確認された。

平安時代木簡の釈文などの詳細は、『木簡研究』(年刊。現在37冊)を活用して収集した。同誌に未掲載の木簡は、調査機関刊行の報告書や自治体史などを参照した。

(2) 調査対象についての特記事項

新たに出土した木簡や、釈文の検討が充分に行われていない木簡については、調査旅費を利用して実物の調査を行い、資料収集と事実関係の確認に努めた。研究期間中に木簡・墨書土器など平安時代出土文字資料の実物調査を行った市町村は、奈良県橿原市・桜井市・天理市、兵庫県神戸市・豊岡市、愛知県豊橋市、静岡県浜松市・磐田市、埼玉県熊谷市、群馬県前橋市、秋田県大館市、鳥取県鳥取市・倉吉市、熊本県八代市などである。

2010年以降に古代木簡の出土があいついだ鳥取県については、新出資料の調査とともに、過去の調査の出土資料も対象とし、墨書のある井戸杵など大型木製品を除く全ての古代木簡を熟覧調査する機会を得た。その結果、多くの木簡について新たな釈読成果を示すことができた。

1990年代以前に出土した木簡のうち、釈文の表記法や型式番号の不明な資料については、奈良文化財研究所史料研究室に保管している調査当時の調査記録(記帳)、写真台紙などに立ち返って検討を加え、正確な釈文の提示に努めた。

(3) 実物調査

実物調査の方法は、熟覧と写真撮影である。とくに、平安時代を中心とした古代木簡の出土事例に著しい地域や、未報告のままとなっている木簡がある地域については、複数回現地へ赴き、各地の発掘調査機関と連携しつつ、記帳、高精細赤外線写真撮影を手がかりとした調査を行い木簡の釈読を進めた。

新たな釈読成果は、調査機関の発掘調査報告書や木簡の専門学術雑誌において、公表をはかった(4研究成果(2))。

(4) 関連する調査研究

平安時代の伝世木札について、調査の機会を得た。対象は、愛知県豊橋市の普門寺所蔵の永意起請木札。写真撮影および文化財科学的な調査は28年度に予定されたため、平安時代の大型木簡との比較検討は28年度の研究課題とし、本科研では現況の確認とれによる比較検討にとどめた。

研究成果公開の一貫として、奈文研に属する飛鳥資料館の展示において、その図録解説原稿、展示パネルなどに成果の一部を反映させた(図書)。

4. 研究成果

(1) 本申請研究の最大の成果は、2015年までに公表された、全国出土の平安時代木簡を

集成し、その積文を集成した資料集『平安時代木簡集成(稿)資料編』を編集したことである(図書)。この資料集は、平安時代の五畿七道順と、文書・荷札付札など内容別に積文を掲げており、当該期の木簡を網羅的かつ様式や機能に注目して把握できるようになった。

- (2)古代木簡が近年急増した鳥取について、既存の積文を再検討し古代木簡を集成した「因幡国・伯耆国関係古代木簡集成(稿)」を公表した(雑誌論文)。加えて、鳥取県内の新出資料、再調査により積文をあらためることができた資料について、その調査成果を公表した(雑誌論文)。
- (3)平安時代木簡の機能と特徴について、『平安時代木簡集成(稿)資料編』(図書)の内容別積文により、以下のような点を指摘できる。

文書木簡は、公式様文書では啓、解、符、牒がみられる。ただし、啓はやや丁寧な上申文書として用いられており、牒も差し出しは不明であるが上申文書であることから、解や進上木簡とあわせると、文書木簡の大半を上申文書が占めている。7世紀にみられた多様な文書牒は存在せず、上申文書としての性格が定着している様子がうかがわれる。下達文書の符は、多くが郡符である。

その他の文書木簡は、石川県加茂遺跡出土の加賀郡勝示札に典型的にみられるように、掲示を目的とした大型のものが増える傾向にある。50~60cmを超える大型の帳簿や、札・勝示札・起請札・経典読誦にかかわる巻数板を類例としてあげうる。加えて、呪符木簡やこの時期以降に登場する卒塔婆も、同じ系譜に属していると思われる。

題籤・題籤軸など、文書の保管管理にかかわる木簡が多くみられ、文書行政の深化にともない、紙の文書に深くかかわる墨書木製品が全国的に一定量認められる。

年紀のある確実な荷札は、延暦十年代に限られ、それ以降のものは確認されない。符札は確実に衰退している。付札は多種多様なものがみられるが、「人名+米の種類+数量」ないし「(郷名+)人名+数量」の記された051型式の付札が全国的に展開している。恐らくは米に付された付札であると考えられるが、その機能は明らかにできなかった。

井戸梓墨書も多く認められるが、紀年のある曲物墨書は、現在のところ延久3年(1071)以降の畿内諸国からの出土に限られている。

卒塔婆、こけら経などの仏教民俗関係資料が登場し、12世紀以降、鳥羽離宮など都城周辺から次第に諸国に伝播する様子が確認できる。

- (4)木簡の減少をはじめとした平安時代出土文字資料論にかかわる論点として、次の2

点が指摘できる。

平安時代木簡が減少している状況は、都城出土木簡が著しく少ないこと、諸国からの更進物荷札の京進が概ね8世紀末までしか確認されないこと、古代木簡の7~8割を占めるとされている削屑が、下野国府跡の1000点以上の例を除くと、平安京跡でわずかに認められるに過ぎず、全体では2割程度しか認められないこと、などに起因している。削屑の減少は、文書木簡を再利用する機会が減少していることを示し、掲示する大型の文書木簡の増加ともかわり、ここに木簡の機能の変化、当該期の木簡の特徴を見て取ることができる。

平安時代木簡が量的に減少するのに対して、墨書土器は、対照的な出土状況を呈している。地方遺跡から出土する墨書土器は、8世紀に属する遺物は比較的少なく、その盛期は9世紀後半から10世紀初頭までの時期に認められる。この関係性の解明は、当該期の出土文字資料研究において、継続して追究すべき課題であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計11件)

山本 崇(単著)「その後の藤原京 藤原宮京の退顧過程」奈良女子大学古代学学術研究センター編集・発行『都城制研究(9) 都城の廃絶とその後』2016年3月、pp.27-46)【依頼原稿、査読なし】

山田 昌宏・山本 崇(共著)「鳥取・岩吉遺跡」(『木簡研究』第37号、2015年11月、pp.178-181)【依頼原稿、査読あり】

加川 崇・山本 崇(共著)「鳥取・青谷横木遺跡」(『木簡研究』第37号、2015年11月、p.182)【依頼原稿、査読あり】

根鈴智津子・岡平拓也・山本 崇(共著)「積文の訂正と追加(一八) 鳥取・大御堂廃寺(第二二号)」(『木簡研究』第37号、2015年11月、p.189)【依頼原稿、査読あり】

清野 孝之・山本 崇・東野 治之(共著)「飛鳥寺の刻書瓦」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2015』2015年6月、pp.52-55)【調査報告、査読なし】

山本 崇・藤井 裕之(共著)「藤原宮木簡の樹種2」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2015』2015年6月、pp.105-106)【調査報告、査読なし】

山本 崇(単著)「因幡・伯耆の古代木簡」(島根県古代文化センター編『しまねの古代文化』第22号、2015年3月、pp.95-101)

【依頼原稿、査読なし】

山本 崇(編)「因幡国・伯耆国関係古代木簡集成(稿)」(島根県古代文化センター編『しまねの古代文化』第22号、2015年3月、pp.129-140)【依頼原稿、査読なし】

山本 崇・高尾 浩司・藤井 裕之(共著)「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2014』2014年6月、pp.52-53)【調査報告、査読なし】

山本 崇(単著)「書評 高島英之著『出土文字資料と古代の東国』」(『日本歴史』第787号、2013年12月、pp.107-109)【依頼原稿、査読あり】

山本 崇(単著)「近年の木簡調査研究の動向」(『考古学ジャーナル』649、2013年11月、pp.9-13)【依頼原稿、査読なし】

[学会発表](計5件)

山本 崇(単独)「2015年全国出土の木簡」(木簡学会第37回研究集会、奈良市(奈良文化財研究所)、2015年12月6日)

山本 崇(単独)「その後の藤原京 藤原宮京の退廃過程」(第9回都城制研究集会「古代都城のその後と古都へのまなざし」、奈良市(奈良女子大学)、2015年2月11日)

山本 崇(単独)「2014年全国出土の木簡」(木簡学会第36回研究集会、奈良市(奈良文化財研究所)、2014年12月6日)

山本 崇(単独)「因幡・伯耆の古代木簡」(島根県古代文化センターシンポジウム「よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代社会の実像」パネラー、島根県出雲市(大社文化プレイスうらら館)、2014年9月8日)

山本 崇(単独)「2013年全国出土の木簡」(木簡学会第35回研究集会、奈良市(奈良文化財研究所)、2013年12月8日)

[図書](計11件)

山本 崇編『平安時代木簡集成(稿)資料編』(私家版、2016年刊行予定、320頁)

奈良文化財研究所編(共著)『坂田寺出土建築部材調査報告書』(2016年3月、32頁)分担執筆・山本 崇(単著)「第 4章関連調査 3 墨書資料調査」(p.19)【調査報告、査読なし】

天理図書館編『古語拾遺』新天理図書館善本叢書 第1期国史古記録第4巻、2015年10月、八木書店、160頁)分担執筆・山

本 崇(単著)『『古語拾遺』嘉禄本・暦仁本解題』(pp.1-16)【依頼原稿、査読あり】

奈良文化財研究所飛鳥資料館編(共著)『キトラ古墳と天の科学』(飛鳥資料館図録第63冊、2015年10月、64頁)分担執筆・山本 崇(単著)「観勒以後 7世紀の暦と時刻制度」(pp.21-26)【査読なし】

館野和己編『日本古代のみやこを探る』勉誠出版、2015年6月、640頁)分担執筆・山本 崇(単著)「菅原行幸考 平城遷都前夜のヤマト盆地北部」(pp.73-97)【依頼原稿、査読あり】

条里制・古代都市研究会編(編集委員金田章裕・山本 崇など8名)『古代の都市と条里』(吉川弘文館、2015年4月、352頁)分担執筆・山本 崇「畿内 大和」(pp.204-215)【依頼原稿、査読あり】

本郷真紹監修・山本 崇編集『考証日本書異記 上』(法蔵館、2015年3月、432頁)

奈良文化財研究所編(共著)『歴史の証人木簡を究める』(クバプロ、2014年8月、208頁)分担執筆・山本 崇(単著)「木簡を広げる 古代以外の、さまざまな地域の木簡」(pp.91-114)【依頼原稿、査読なし】

山本 崇編『全国木簡出土遺跡・報告書総覧2014』(私家版、2014年6月、368頁)

山本 崇編『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』(木簡学会、2014年2月、208頁)

奈良文化財研究所飛鳥資料館編(共著)『飛鳥藤原京への道』(飛鳥資料館図録第59冊、2013年10月、64頁)分担執筆・山本 崇(単著)「官道の整備と外国使節の往来」(pp.25-30)【依頼原稿、査読なし】

[その他]

朝日新聞連載(朝刊奈良版)山本 崇(単著)「飛鳥むかしむかし」109 古京の成立編 条坊から条里へ(2016年1月8日)110 遷都直後の藤原宮(2016年1月15日)112 弘仁木簡と藤原宮周辺の庄園(2016年1月29日)

山本 崇(単著)「木簡「文字記す文化」へのまなざし」(朝日新聞2016年1月27日夕刊文化欄)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 崇(YAMAMOTO, Takashi)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号: 00359449